



堀坂浩太郎・子安昭子・竹下幸治郎 著
『現代ブラジル論——危機の実相と対応力——』

上智大学出版 2019年 348ページ

ISBN 978-4-324-10573-3

世界経済でも存在感を増したブラジルであるが、ここ数年どこか変調をきたしているのではないか…しかし、その実態はどこか捉えがたい感じがする—これはラテンアメリカに関心を有する人の多くが抱いている最近のブラジル観ではなかろうか。

本書は、そのタイトルや新書版という形態から、ブラジルの最近の動きを手軽に知りたいという読者に、簡単にメッセージを伝えることを目的とする解説本であるように見える。しかし、そのような期待は、良い意味で裏切られるだろう。確かに、本書の第Ⅰ部は、2000年代初頭のルーラ大統領時代におけるブラジルの躍進から、政治・経済的混乱、そしてボルソナロの台頭に代表される目まぐるしい近年のブラジルの動きが、政治・経済・外交の面から手際よく整理されており、なぜ政治が左から大きく右にふれてきたのか簡潔に理解できるようになっている。しかし、現代の状況をきちんと理解するためには、もっとブラジルの政治・経済体制のことを深く知る必要がある、という欲求が生まれ、それを見越したかのように、1985年以降のブラジルの制度設計に関わる分析が第Ⅱ部でなされる。長年にわたりブラジルを研究し続けてきた筆者らによる解説は説得力がある。続く第Ⅲ部では、ブラジルを根本的に規定する要因である植民地期からの歴史や地誌、人などの丁寧な説明がなされる。ここまで読むと、直近のブラジルを簡単にわかりたい、という当初の目論見とは裏腹に、読者は引き込まれるようにブラジルに関する植民地期からの包括的な知識を得ることになる。最後の第Ⅳ部では、今後の展望が示され完結する。

構成の仕方の妙もさることながら、それぞれの分野からブラジルを研究・調査し続けてきた書き手によるブラジル論を、新書という親しみやすい形態と文体、さらに理解を助けるインフォグラフィックスとともに提供してくれたことに感謝を表したい。「ブラジルはどこに向かっているか」、あるいは「その対応力はいかほどか」といった読者の疑問に対し、大見出しで簡単に答えを示すことはしていないが、思考の材料をわかりやすく十分に提示することで、読者自ら答えを見いだすよう促す啓蒙書という印象をもった。

北野浩一（きたの・こういち／アジア経済研究所）